

令和7年度（2025年度）戦争資料展

あゆみ おおづ「飛龍」の軌跡

令和7年(2025年)7月29日(火)～8月31日(日)



写真

上：健軍飛行場で敗戦を迎えた飛行第六〇戦隊

第三中隊の重爆撃機「飛龍」爆撃機型

下：内牧(畑地区)に建立された慰霊碑（再建）

終戦約一カ月前の昭和二〇年（一九四五年）七月五日夜、陸軍第六十戦隊第二中隊所属原正陸軍大尉ほか乗員七名が悪天候のなか、北九州曾根飛行場から健軍飛行場へ夜間訓練の飛行中に米軍機と遭遇し交戦。北向山の通称「カグメ」の原生林に墜落、炎上し、戦後暫くは北向山に炎上の痕跡が残されていました。

搭乗員は戦後まもなく茶毘（たび）に伏され、内牧畑（はた）地区に木柱の慰霊碑を建立しましたが、平成二年七月五日飛行第六十戦隊第三中隊の元隊員が中心となり、墜落地点により近い畑地区の共同墓地の一角に慰霊碑を再建しました。

本企画展では、墜落現場で回収された「飛龍」の部品を中心に戦争資料を紹介し、終戦から八十年の軌跡を考えるとともに、今一度平和について考える機会とします。

大津町歴史文化伝承館展示室

大津町歴史文化伝承館

〒869-1233 熊本県菊池郡大津町大津 1109 番地

電話：096-293-4100

FAX：096-293-4101

開館時間：午前9時00分～午後5時00分

（最終入館は午後4時30分）

休館日：月曜日（8月11日（祝）も休館）

入館料：無 料

「飛龍」について

「飛龍」は陸軍の試作番号を表す「キ」番号で、「キー六七」を付けられた重爆撃機です。昭和 14 年 12 月、陸軍は三菱に「最高速度 550 キロ以上、500 キロ爆弾を掲載して作戦半径 1,000 キロ」という仕様の機体の開発を要求しました。

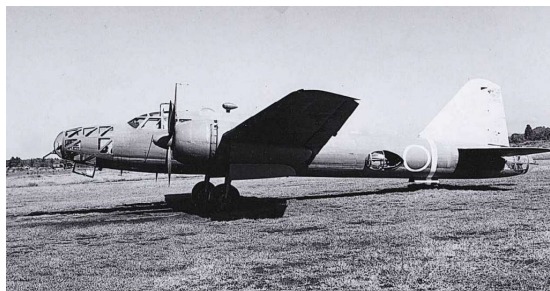
攻撃の際に急降下を可能とし、低空でも地上目標を飛び越せる、いわゆる「垣根越し飛行」ができるような機体性能と軽快な操縦性が要求され、航空機用の 2,000 馬力空冷星型エンジン「ハロー四」を搭載した双発機となりました。

開発にあたっては、設計の当初から大量生産を考慮し、それまで溶接作業の熟練と、溶接後の処理にも相当の手数を必要としていたものを、出来る限り溶接部品を鍛造ならびに鋳物に置き換えることで溶接工程を最小限にし、生産性を上げました。

また、大型機では初の試みとして胴体を前端(前方砲座)、前部(爆撃席部)、中部(操縦席・爆弾倉部)、後部 2 カ所(側方砲座・尾輪・尾翼基部)、尾部(尾部砲座)の分割生産とすることで量産可能な機体とし、県内各地の学校工場でも分割生産されていました。

こうした各工程の作業効率化により最終的な生産機数は 697 基となり、熊本でも昭和 19 年 4 月の 2 機を皮切りに 20 年 8 月まで 42 機が生産されました。昭和 19 年の陸軍による機種調整に伴い、戦闘機は中島の四式戦、爆撃機はこの飛龍が指定されて以降集中生産に入り、陸軍最後の傑作重爆撃機となりました。

「キー六七」はその良好な操縦性から、陸軍機としてはめずらしい魚雷搭載型が 100 機生産され、台湾沖航空戦にも参加し、海軍でも「靖国」として採用されました。



健軍（熊本）飛行場の「飛龍」飛行第一七〇戦隊機

展示資料について

昭和 63 年(1988 年)に刊行された『大津町史』の編纂に関連して、現地調査を実施した際に回収されたもので、主なものとして尾翼方向舵、九五式自動操縦装置に関する接続弁、爆撃操作盤の部材、主翼燃料タンクの蓋等 10 点を展示しています。

これらの部品は「飛龍」の資料としては国内 3 例目、部品の特定が行える航空機部材としては 8 例目の資料であり、保存状態も比較的良好とされています。



左：垂直尾翼の方向舵(長さ：縦 210 cm、横 80 cm)

中：燃料蓋外面(上段に「翼 1」、下段に「燃料注入口」と書かれている。)

右：燃料蓋内面(「208 立(リットル)」と書かれている。)